

北斗句会

北斗句会 自薦三句（令和四年）

〱 五十音順 〰

くの字 石田きよし

もの言はず膨らむ餅や妻の留守

ひと列車遅らせ湖の鳩とゐる

木道のくの字くの字や花菖蒲

若 緑 大崎石州

大社正中づんづんと若緑

ぐい呑みの底に吉の字冷し酒

月々の聲聴く句会秋扇

風光る 大森康正

風光る碎くる磯の波頭

武者人形吾と齡を重ねけり

木枯や頼り頼られ共白髪

雪の朝 竹内雲泉

無の世界いよいよ近し秋茜

妻の肩そつと除きぬ木の葉髪

道をうつ鉄鎖の音や雪の朝



北斗句会

遊行の道 田中資凡

雪降るや遊行の道へ又一步

若返る揃ひのセーター赤と黒

薔薇の香やさしだす妻の唇紅し

花南瓜 長池豆陽

亡きひとの消せぬメールや散紅葉

みどりごの握る力や柿若葉

挙手競ふ園児のやうな花南瓜

向日葵 藤田紀潮

特攻の墓碑に影おく冬紅葉

向日葵や戦なき日のウクライナ

硫黄島に果てし御霊や銀河濃し

八十路健康 宮下ひかる

初伊勢や八十路健康感謝せむ

柿食へば九人家族の彼の田舎

赤い靴履く少女像薔薇香る



北斗句会

雪

森田光彦

柿食ふやころころ笑うふ妻のゐて
杉の径照らしてをりぬ鳥瓜
限りなく降る雪肩に伍長像

寒 柝 吉岡誠山

富士を背に囀り競ふ揚雲雀
蒼天に締め寒柝響きけり
駿河より見上げる富士や鳥渡る

